

父子、手紙で再会！ ～萩藩士・近藤家のルーツをさぐる～

はじめに

令和6年度、「近藤家文書（神奈川県）」（5件16点）が新たに文書館資料として収蔵されました。今回の月間小展示では、「近藤家文書（神奈川県）」のうち、近藤家の歴史を考えるうえで興味深い資料を紹介します。

1 近藤吉重書状（近藤家（神奈川県）3）

「近藤家文書」には、卷子が4件あります。これらに成巻されている古文書の大部分は、「閥閥録」に掲載されていることから、その内容はすでに知られたものです。「閥閥録」によると、近藤^(実)惣左衛門（萩町人。刊本『萩藩閥閥録』第四巻・遺漏）が所有していた文書がこのたびの新収蔵資料にあたります。

既知の資料がある一方で、「閥閥録」未収録文書もありました。近藤吉重書状（近藤家（神奈川県）3）はこれまでに内容が知られていなかった資料です。

書状にはどのようなことが記されているのでしょうか。内容を確認してみましょう。

其方事先年当国立退
 候以後いつく二^(河)ゐ候やと存候
 処、安芸の元就^(毛利)二奉公之由
 被聞候、夫二付此度下人佐田
 小太郎在所為見廻指越候
 新参之事候間、諸事無油断
 奉公可被仕候、我等儀者千王殿出
 世之志之外者、又其方氣遣
 計候、内々其方へ可遣と存候、
 脇指相伝之物二候へ共、此度
 乗替共送り進候、其国茂
 せり相最中之由候間、無二心
 之奉公可被致候、我等心中者
 小太郎可申候、恐々謹言、
 八月三日 吉重（花押）
 近藤左衛門佐殿
 参

吉重と「左衛門佐」（＝清友）は、近藤家の系図である「藤原氏近藤之一系」（近藤家（神奈川県）4）により父子関係であるとわかります。冒頭に、清友が「先年」に「当国」から立ち退いたのち、吉重は清友を見失っていたと記されています。清友が安芸国（現広島県）の毛利元就に「奉公」＝仕官しているという情報を得た吉重は、連絡を取り合うため「佐田小太郎」なる人物を派遣したのです。

続けて、吉重は「新参之事候間、諸事無油断奉公可被仕候」としたためています。これをいま風に訳すと「新しい職場では慣れないこともあるだろうから、油断することなく仕事に励みなさい」くらいの意味合いでしょうか。父は子のことがずいぶん心配だったようです。

このように、文書の前半では、久しぶりの音信に喜びを禁じ得ない吉重の姿がうかがえます。

すが、後半になると話の内容が変わります。

吉重は、「千王殿」の「出世」＝成長のことについて、清友が気を揉んでいるものと推察して、今後はこの件の情報を伝えることを約束し、さらに脇差もこの手紙とともに使者に預けました。吉重は「此度乗替共送り候」と記し、仕える先に違いがあれども、清友には近藤家相伝の脇差を持っていて欲しかったのでしょう。これも親心なのかもしれません。

2. 「当国」と「千王殿」にみる近藤家のルーツ

文書中に登場する「当国」・「千王殿」とは、どこの誰なのでしょう。このことについては、系図にヒントが隠されており、吉重の項には、「長曾我部元秀力家臣也」と記されています。長曾我部元秀^(兼序)は、土佐国^(現高知県)の国人領主ですから、「当国」は土佐国である可能性が高まります。

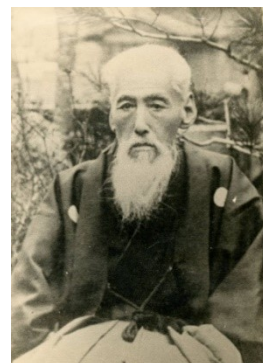
さらに系図には、元秀は籠城の際に吉重を呼び出して、嫡子の「千王丸」を託して城から脱出させたことが記されています。元秀は岡豊城に籠城して本山茂宗と戦って敗れ、その際、子息を城から出したとされていますので、「千王殿」は長宗我部国親であると考えられます。

あわせて系図の清友の項を確認してみると、「子細有テ土佐を出奔シテ直ニ芸州ノ毛利元就」に仕えたと記されています。

3. 近藤清石の調査研究

ただし、この系図は後世作成されたものとみられるので、飾りがついた文言や、史実に即さない叙述もあると考えられることから、これをただちに鵜呑みにはできません。近藤家の一族で、郷土史家としての顔を持つ近藤清石^(ただし養子)もまた、家のルーツについて考えたようです。そのことがうかがえる資料として「土佐編年記事略抜粹 山田長宗我部近藤氏の事」^(近藤清石文庫 396)があります。

清石の文化に対する厳格な姿勢^(令和6年度第6回月間小展示資料参照)は、自家の歴史にも向けられました。清石は上記の国親脱出について、信賴^(恐らく近藤に非ずなり)のおける資料を見つけられなかったことから、「恐非近藤也」と述べ、断定を避けつつ近藤家の直接的関与を否定的に捉えています。



近藤清石写真
〈近藤清石文庫 554〉

おわりに

吉重の書状には、当時の文書表現として疑わしい箇所がありますが、系図に反映されているように近藤家の自認するルーツは四国に求められるとされます。改めて清石の指摘は留意すべきで、近藤家のルーツをさぐるうえでは他の関係資料と突き合わせて検討する必要があります。本展示で紹介した資料が近藤家の歴史を考えるきっかけになれば幸いです。

資料は公開されたばかりです。今後の調査研究が待たれます。